

大切に使う身近なエネルギー

二月は省エネルギー月間

私たちの暮らしは、灯油で暖をとる、炊事や洗たくをする、明かりをつける、テレビを見る……これらはすべて石油やガスや電力というエネルギーを使っています。エネルギーなしには、一日も暮せません。しかし、エネルギー資源には限りがあります。しかも、わが国はエネルギー資源のほとんどを海外に依存しています。限りある貴重なエネルギー資源をムダなく、有効に使うよう心がけたいものです。二月は「省エネルギー月間」です。ここで、もう一度私たちの身のまわりをふりかえってみましょう。

石油

九九・七％を輸入

年に六兆円、輸入総額の約三割

わが国は、外国から必要なものをいろいろ買っています。食料品はもちろん木材などの原料品、金属、繊維品などの加工品などです。その中でも、一番大きな買い物といえば石油です。五十二年度でみますと、石油の購入代金が約六兆二千億円で、輸入総額の約三分の一を占めています。四十八年の秋以前、すなわち石油パニックで原油の値

灯油

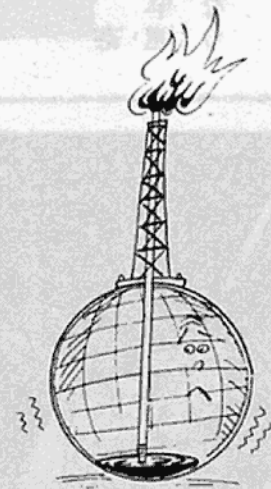
貴重な「一〇％の暖かさ」

灯油は、溶剤や発動機の燃料、ビニールハウスの保温用などの工業、農業を問わず広く使われています。なかでも、用途としては家庭の暖房用が最も多く、全体の七五％を占めています。

当然、灯油の需要は冬場に集中します。かといって、原油から灯油ばかりをつくるわけにはいかなのです。というのも、灯油は、原油百から一〇％程度、約一〇％しかとれないという貴重なものなのです。

一〇％、つまり、ご家庭の灯油一缶分は、十缶分の原油からとれたもので、灯油を必要だけ確保するには、それだけ大量の原油が必要になるといわけです。

私たちが冬の間に使う灯油は、需要の少ない六、十月の間にせつせと蓄えられた「貴重な一〇％」なのです。現在、全国で約二千二百萬世帯の家庭で、灯油が暖房用として使われています。各家庭が



ひと冬に一缶節約すると、約四十万リットル、二十万トンカー二隻分相当が浮く勘定になります。私たちが一人ひとりのちよつとした工夫や知恵が、日本全体では膨大な量の省エネルギーとなつて実を結ぶのです。

電力の七割は輸入

石油がダメなら、電気があるさ——しかし、これはとんでもない勘違いです。私たちが使う電気の七割は、火力発電によるものです。その燃料のほとんどは石油なのです。石油の九九・七％は海外に頼っているわけですから、結局、電気も元をただせば「輸入」していることになりました。

便利さになれて、あたりまえのように使っている電気も、その七割は貴重な石油に頼っていることをお忘れなく。



私たちの暮らしに欠かせない石油、使い方を工夫して、ムダのない生活を送りたいものです。

歳時記

節分

節分が近づくと、一合マスに入つたイリ豆がお菓子屋さんの店頭姿を見せます。昔は、台所にある一升マスにイリ豆を入れて「鬼は外、福は内」とまいたものです。今は、計量米びつの普及で、マスは台所から消えてしまいました。

節分とは、もとは節、すなわち季節の分かれ目のことで、立春、立夏、立秋、立冬の前日がすべて節分というわけです。ただ、立春は一年の境い目ということで重くみられ、とくに立春の前日だけを節分というようになりました。

新暦では、毎年二月三日か四日今年は三日です。

この日は除災のために、鬼打ちまたは豆まきと称して、イリ豆をまいて鬼を追いはらう行事が、神社仏閣や家庭で行われています。今は少なくなりましたが、この時ヒイラギの枝にイワシの頭を刺して戸口にかざる地方もあります。いま、大豆は九七・四％が輸入で、大部分がアメリカ産です。といつても、みそ、しょうゆ、とうふ、納豆など日本を代表する食べ物、納豆の原料の豆がほとんどアメリカ製なので、福豆がアメリカ製でも、ちつともおかしいことはいわけですが。